

「持っているけど、持っていない」

ペトロの手紙一 4章 10～11節

人文学部チャプレン 柳田 洋夫

この聖学院大学は、キリスト教を根本にしているところであるということは、みなさんすでにご存知だと思います。そのことを学問的な側面から言いますと、聖学院の理事長であり、また、ピューリタン研究などで広く知られた神学者の大木英夫先生が、この聖学院の学風をかたちづくられました。大木先生はまた、アメリカの神学者・政治学者であるラインホールド・ニーバーに直接学び、いわゆる「ニーバーの祈り」を日本に紹介しました。このようなものです。

神よ、変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを識別する知恵を与えたまえ。

これは日本でもよく知られているもので、宇多田ヒカルの曲の歌詞にも取り入れられていたりします。また、最近現役引退を表明したボクシングの村田諒太選手は、このニーバーの祈りをそらんじるほどに親しんでいるという話を聞きました。また、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』という映画で有名なマイケル・J・フォックスという俳優も、このニーバーの祈りを毎日祈ったと自伝に記しています。

ラインホールド・ニーバーは、キング牧師やオバマ元大統領にも大きな影響を与えた神学者であり、その思想についてもこれまで多くの研究と紹介がなされてきました。また、大木先生以来、この聖学院大学は、ニーバー研究の一つの中心となってきました。私自身も、三冊翻訳を出させていただきました。ニーバー研究の第一人者であり、聖学院で長く教えられた高橋義文先生との共訳で、『人間の運命』『人間の本性』、そして、昨年は、『悲劇を越えて』という翻訳を出しました。みなさんもぜひ、機会があったら挑戦していただきたいと思います。

今日はその中から、奨励題にも掲げました、「持っているけど、持っていない」(having and not having)、という、一見奇妙なニーバーの言葉を紹介しつつ、聖書の言葉について一緒に考えていきたいと思います。これは、『人間の運命』(Human Destiny)という著作にある言葉です。何について、持っているとかいないとか言っているのかというと、「神の恵み」についてです。ニーバーは、神の恵みというものは、私がそれを「持っているけど、持っていない」と逆説的にしか言いようのないものだと言います。それを、あたかも単純に「持っている」とだけ理解してしまうとき、私たちは大きな罪に陥るともニーバーは言います。

恵みを「持っているけど、持っていない」。このニーバーの言葉を、私たちはどのように理解すればよいでしょうか。そのことについて、私なりに考えるところを、三点にまとめてお話ししたいと思います。

その第一は、恵みとは神さまからお預かりしているものであるということです。恵み、ということ私たちが自身に即してみるならば、たとえば、置かれている環境や、与えられている能力、などもそうです。そのようなことも含めて、恵みというものはいずれも、神さまからいわばお預かりしているものです。そうである以上、もろもろの恵みを、あたかも自分自身で手に入れたり、つくりあげたりしたもののごとく独り占めすることはできないということになります。

このことから、第二のこと、つまり、恵みは互いに分かち合うべきものである、ということが出てきます。このことに関して、本日与えられているペトロの手紙一 第4章10節には、「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい」とあります。ここでは、「私たちそれぞれに与えられた能力」という意味合いで「賜物」(gift)という言葉が用いられています。そして、賜物とは、それを生かして互いに仕え合うためのものである、と述べられています。

このことに関して、今の日本の社会は、とにかく何とかして生き残る、場合によっては結果的に人を蹴落としてまでも自分だけは生き残る、そういう気分が、厳しさを増す時代の中ではびこりつつあるのではないかと私は感じています。しかし、みなさんは、そういう気分が安易に同調しないでいただきたいと思います。そういう人が増えれば増えるほど、この社会は共倒れへの道をますますまっすぐに進むことになってしまいます。そうではなくて、自分自身に与えられた、さまざまな意味における神さまからの贈り物、賜物をこの世の隣人ために生かすことを考えてほしいと願うものです。

さて、恵みを「持っているけど、持っていない」ということに関して申し上げたい第三のことは、恵みとは日々新しく受け取られるべきものである、ということです。旧約聖書の出エジプト記には、約束の地を目指す途中で食料が欠乏したイスラエルの民に、主なる神が「マナ」と呼ばれることになる、不思議な食べ物を与えてくださったことが記されています。そのマナは、毎日必要な分が過不足なく与えられました。また、それを翌朝まで残そうとしても腐ってしまい、朝ごとに新たに与えられるものを集めたことと記されています。そのように、私たちにとって恵みとは、日々新たに受け取り直すべきものでもあります。

以上、「持っているけど、持っていない」というラインホルド・ニーバーの言葉を、聖書に即しつつ、どのように受け止めたらいいかについてお話しましたが、もう一つ付け加えたいことがあります。それは、恵みを「持っていないけど、持っている」ということもある、ということです。先ほど触れましたマイケル・J・フォックスは、若くしてパーキンソン病にかかり、体が言うことをきかなくなっていました。俳優生命が断たれることも覚悟しなければなりません。しかし、彼は、その状況に立ち向かうべく新たな人生の旅に乗り出しました。変えられるものを変える勇気をもって、同じ病気で苦しんでいる人々の状況を少しでも良くするために、パーキンソン病についての啓蒙活動に携わり、またその研究費を増やすべく政府に働きかけるという行動を起こしました。その自伝において彼は、この病気はまさに「贈り物」だとして、こう言います。「この病気にかからなければ、ぼくはこの贈り物の包みを開けることは決してなかったらうし、これほど深く豊かな気持ちにもなれなかったはずだ。だからぼくは自分のことをラッキー・マンだと思うのだ」。地位も名声も全て失ったかのように思われたとき、逆に思ってもみなかった多くの深く豊かなものが与えられたという彼の人生そのものが、「持っていないけど、持っている」ということを証していると思います。

いずれにせよ、自分自身が今何をほんとうに持っているのか、またほんとうに必要なものは何かということは、究極的には私たち自身が完全に知りうることはありません。それは、必要なときに、ふさわしいかたちで上より日々新たに示されることです。さらに言えば、「わたしの恵みはあなたに十分である」と、パウロが苦難のただ中で主から告げ知らされたとおり、私たちには十分な恵みが実は与えられています。互いに仕え合う歩みの中で私たちがそのことを知ることができるならば、「持っているけど、持っていない」そして「持っていないけど、持っている」という言葉は単なる逆説であることをやめて、私たちの人生の真実となるのだと思います。

お祈りをいたします。黙祷の姿勢をとって、共に祈りを合わせていただければと思います。

主イエス・キリストの父なる御神、私たちは恵みを、この世の隣人のために生かすために生まれてきたことを今、改めて思います。どうか、自分に与えられている賜物と、それを生かす道を見出すことができますよう、上よりの導きをお与えください。

尊き救い主、イエス・キリストの御名によって祈り願います。

アーメン。

2023年6月8日 聖学院大学 全学礼拝